

# まち路地の再生とコンパクトシティづくり

## 芹橋まちづくり基本戦略

こうした特徴を踏まえて、青木さんは、芹橋のまちづくりの基本戦略をつぎのように提案されました。

### ① 路地は、現状幅員の維持

現状の2.7mの幅員を維持しつつ人に優しい生活空間として改善することで、脱クルマ時代のヒューマンなまちの先駆けとして全国に発信できる。

### ② 敷地は、コンパクトな敷地維持+更なる分割

路地とコンパクトな敷地群によって構成されるまちの構造を維持することで「人に優しい」安心・安全な空間が生まれ、それがまちの魅力になる。

コンパクトな敷地と敷地分割により、少ない費用で個性的な都市型住宅、小型店舗、飲食サービス施設などがさまざまに立地できる。これらの機能がエリア内に点在することで、路地を介した回遊性が生まれる。

### ③ 建物は、個々の防災性能・美観などの向上

修復、建て替え更新、リフォーム、リノベーション、コンバージョンなどのさまざまな手法による個別建物の省エネ・環境性能、防災性能の強化、美しい外観の創造。建物の躯体の耐火性能は大幅に向上しており、法善寺横町(大阪市)の再生では、道路幅2.7mで、4m同等の耐火性能を実現した。

### ④ 庭は、前庭の確保と庭路樹による緑化の促進

住宅や店舗の前面に庭を設け、そこに植樹して沿道敷地の樹木で路地を緑化する。かつては、見越しの松などの景観が形成されていたものの再生である。

## 芹橋の現状と課題

この後、芹橋の住民と市役所、彦根景観フォーラムで、現状を確認しました。

まず、路地は、軽自動車が行き通る幅で、車生活



には不便であり、消防車などの進入が困難で火災に不安がある。反面、高齢者や子どもは安心して歩き、遊べる。

建物は、不在地主による賃貸住宅が多く、老朽化した木造の空屋および空地が増えているが、最近は賃貸専門業者による集合住宅の建設が増えている。

住民は、教師、銀行員、サラリーマンが主体で、市の中心部でありながら若い人が出てゆくことで、空洞化・高齢化が進んでいる。

これに対して、どういうまちを目指すのか目標像がなく、手探りであることなどが報告されました。

## 焦点は、電柱を契機とする路地再生

芹橋では、電柱の地中化が大きなテーマになっています。地中化は、現状より車が通行しやすくなる、景観がよくなる反面、電柱に較べて設置コストが10倍、維持管理費も大きく利用料金が高くなること、地下から電線を住宅に引き出す設備が必要になること、災害復旧に電柱以上に時間がかかることが問題点としてあげられました。

この問題は、路地の再生と密接につながっているため、市役所と芹橋の住民で引き続き勉強会を持ち、建築や都市計画の制度の調査、実際に暮らしている住民のニーズの明確化と実現方法の検討、新しく芹橋に住みたいという人たちの像を明確にすることなどを含め、全体的に検討することが提案されました。



青木 仁 氏：東京大学修士。建設省、世界銀行、都市基盤整備公団等勤務を経て、現職。

著書に、「快適都市空間をつくる」（中公新書2000）、「日本型まちづくりへの転換—ミニ戸建て・細路地の復権」（学芸出版2007）、「まち路地再生のデザイナー—路地に学ぶ生活空間の再生術」（共著：彰国社2010）

## それぞれの彦根物語 75

ひこね街の駅「寺子屋力石」《談話室》



### ●エコメモオーケストラの軌跡と今後

6月19日(土)は、エコメモリアルチェンバーオーケストラ代表の若林嘉代子さんから、彦根の誇るべき本格派クラシック団体が、昨年事業仕分けされてしまった現状が伝えられました。

参加者との談話では、彦根市民でも知らない人が多い素晴らしい活動に、それぞれの立場でできることを探しながら、応援していこうという言葉が相次ぎました。

## 多賀里の駅 集い&野菜市

### ●農家のお母さんが語る夏野菜のはなし

7月3日(土)は、多賀でトマトとメロンの栽培をしながら、野菜の魅力をみんなに伝えたいと農家レストランをめざす栗本 泉さん(K農園・多賀クラブ会員)のおはなしでした。おいしい野菜は、高い技術と日々の努力、コスト意識のたまものなんですね。

試食会では、トマトのエキスで炊いたご飯、夏野菜いっぱいスープ、トマトの甘酢づけ、ハーブティなどの料理を楽しみました。



## 足軽辻番所サロン・芹橋生活

彦根芹橋二丁目太田邸

### ●彦根藩の具足師春田家と百姓・足軽

6月20日(日)は、京都女子大学教授、NPO 法人彦根景観フォーラム副理事長の母利美和さんが、彦根藩の在村扶持人(村にありながら藩の仕事をして名字帯刀を許された者)春田家と百姓・足軽との力関係の変化を語られました。

春田家は、江戸初期に彦根藩の甲冑の大量注文を受けて地位が上昇、苗字を許され、息子が足軽に召しかかえられます。しかし、平和な元禄期になると甲冑の注文がなくなり、村内の地位が低下、村人の身分を認めない行動に何度も争議を起こしています。

藩からは身分が確認されますが、それでも効果は一時的で、身分と実力との差が歴然としてきます。江戸時代の実態に迫るお話でした。

参加者との質問では、明治維新で仕事なくなった足軽が親戚を頼って農村に住んでいる証拠が確認できると語られました。廃藩により、上級武士は東京などへ、中級武士は足軽屋敷へ、足軽は農村へと移っていった歴史の転換がうかがえました。



●各行事の予定は、ブログでお知らせします。